

上伊那教育会

第22回授業研修会

平成29年1月21日（土）

上伊那教育会館

◇第1部 実践発表

「集団生活へのスムーズな移行を目指して」 X小学校 Y先生



Zさんは、私が担任する特別支援学級に通級しています。苦手な学習も最後まで取り組み、周りの子どもたちも温かく理解してくれています。でも、時に、相手の思いをうまく受け止められなかったり、自分の思いをうまく表現できなかったりして、友だちとトラブルになってしまうことがあります。でも、Zさんは「友だちと仲良くしたい」という気持ちが強くあるのです。担任として、その願いをかなえてあげたい、上手に友だちと関われるような力をつけてあげたい。そう願い、Zさんを一年間、しっかりと見ていこうと考えました。

Zさんは自己肯定感が低く、家や学校で、「いつも怒られる」と恐れています。だからこそ、自分が責められないようにするために、「自分は悪くない」と主張し、人のせいにしてしまいます。そんなZさんの課題を克服し、集団生活へスムーズに移行できるようにするために、①自分の思いをわかってくれる安心感 ②一緒にどうすればよいのか考えてくれる経験 ③よさを認め、ほめてくれる経験 ④コミュニケーション能力の向上を図る場の設定を大切に支援を行いました。そして、日々の記録を蓄積することで、Zさんの行動の背景にある「思い」と、そのときの自分自身の支援を振り返ることを続けてきました。

このような支援を積み重ねる中で、私自身のZさんに対する見方や捉え方が少しずつ変化してきました。Zさんの思いを汲み、Zさんの気持ちを受け止めながら、どうしていけばよいのかを一緒に考えられるようになってきました。その結果、Zさんは、早く気持ちの切り替えができるようになり、相手の気持ちを意識できるようになってきました。自分の思いを上手く表現でき、相手の思いを上手く受け止めることができるようになっていきました。そして、この「うまくいく経験」が、Zさんにさらに自信をつけ、ますます「うまくいく」ようになりました。

[グループ討議]



[北原和俊先生のご指導]

【Y先生の実践から学ぶこと】

① 子どもをみる、知る、理解する。

私たちは、子どもを見ると、どうしても表に出てくるもの、行為として現れてくるものに目奪われてしまい、なぜそうせざるを得なかったのかという、その子どものうちになる思いを見逃してしまいがちです。特に発達特性のある子どもの場合、その子の立場にしっかり寄り添ってこそ、初めて本音で語ってくるものなのです。

② 教える、指導する立場から、寄り添い同じ立場に立つての関わり・支援

Y先生が意識した「自分の思いをわかってくれる安心感」「一緒にどうすればよいか、考えてくれる経験の積み重ね」「担任、友だち、保護者がよさを認め、ほめてくれる実感」「担任と1対1の関係から、仲間と関わりながら授業に取り組む人間関係」。そのような気持ちと経験があったからこそ、Zさんの自尊感情が高まり、自分の思いを伝えられるようになったり、切り替えがスムーズになったり、コミュニケーション力が向上するなどの変容あったといえるでしょう。



北原和俊 先生

◇第2部 ご講演 「新しい学力と特別支援教育」



福井大学大学院教授 松木健一先生

松木先生には、Y先生がZさんや自分自身を捉え直しながら重ねていった支援や、記録を取ることの意味や価値を論理づけていただきました。また、インクルーシブ教育と新しい学力観の関係など、これからの特別支援教育の可能性についても示唆されました。

さらに、「教師の実践は、実践し、省察し、再構築し、再度実践をすることの繰り返し」「経験するだけではだめ、省察しなければ成長しない」「日々の授業について同僚と話し合うだけでなく、異校種、異学校の教師が授業を見て、話し合いをする。また集って授業を見て話し合いをする。そのことが子どもを深く見取ることを促す」など、この授業研修会の良さに触れながら、専門職としての教師の在り方についても、お話しいただきました。

研修会を終えて（参加者感想）

<Y先生の発表について>

- 教師がその子をどう捉えるのか、どう理解するのかがすべての出発点であると感じました。その子を正しく捉え、より適した手だてを考えていくことが、教師の基本的姿勢であるということを改めて学ばせていただきました。
- Y先生が、温かく、丁寧にZさんとかかわっている姿に感動しました。記録をとって自身の指導を振り返ったり、Zさんの育ちを捉えなおしたり、Zさんの気持ちを聞いて受け止めようとしたり、よさを認め励ましたり…、そのような努力の積み重ねが大切であり、その中でZさんとの信頼関係が築かれていったのだと思いました。
- 何よりもY先生の、Zさんを成長させたいと願う姿が、Zさんに伝わり、Zさんの成長につながったのだと思います。まさに、「教師が変われば、子どもも変わる」という言葉の通りです。たった1年でのZさんの大きな成長は、まさに、Y先生の「愛情の賜物」だと思います。
- 記録の大切さを実感しました。自分自身の記録のつけ方を振り返ってみると、記録しているのは、「できごと」、「子どもの言ったこと」、「自分がした対応」の3つであり、Y先生のような「考察（＝振り返るための観点）」がないことに気づきました。子どもがどうしてもその行為に至り、そう言ったのか。事実だけでなく、その裏にある思いを含めて記録をしていくこと、それを次の指導や支援に生かしていくことの大切さを感じました。
- Y先生自身の見方や考え方が変わっていったということがよく分かりました。Zさんの捉えなおしだけでなく、Y先生が自分自身を捉えなおしていったことで、Zさんも変わっていったのだと思います。教師と生徒、または生徒と生徒の肯定的な依存関係が、学びあえる授業につながっていくと

ということも感じ、授業改善の視点からも参考になりました。

<グループ討議について>

- グループの形式だったので、意見が出しやすくてよかった。さまざまな学校の先生方の情報や、児童生徒とのかかわりの中で感じていることなどを聞いたこともよかったです。
- グループ討議の中でも、先輩の先生方から、記録の大切さを教えていただきました。記録をつけて、とにかく振り返る。その中で、目が届かない子どもの姿が見えてきたり、自分の考えを整理したり、自分のかかわり方を見直したりできる。自分も記録をしっかりとっていこうと感じました。

<北原先生のご指導について>

- 「その子どもの立場に寄り添うことで、子どもは初めて本音を語る」というお言葉が印象に残りました。子どもの願いを大切にすることの重要性を再認識できました。
- 「子どもにとって一番響く場面でなければ、いくら褒めても子どもは“認められている”とは感じない」というお話が印象に残りました。自分自身、褒めるタイミング、ポイントを外してしまうことが多いので、Y先生のように記録を振り返りながら再考したいと思います。
- 北原先生の熱いご指導をお聞きし、元気をいただきました。不易流行という言葉を思いました。

<松木先生の講演について>

- 「障がいは人と人の中にあるもの」というお話が印象に残りました。心のどこかにある「障がいがあるから仕方ない」というあきらめや、「あの子は〇〇だから」という決めつけが、その子の成長を妨げるのだと改めて気づきました。自分が変わらないといけない、と感じました。
- 「障がいは人と人の中にあるもの」という言葉は、今後の私たちの在り方を的確に表している言葉だと思いました。その障がいとなっている「こと」を解決しない限り、次には進めないけれど、逆に言えば、障がいの原因となっている「こと」が見い出せるということでもあると感じました。一方で、障がいのある子どもや保護者には、また別の思いや負担があり、そこを解決していくことも同時に必要になってくると思いました。
- インクルーシブ教育や新しい学力観、アクティブラーニングなどの学び方など、教師がこれからの変化に対応していかなければ、変化に対応できない子どもも育てることになってしまうと痛感しました。苦手を克服してもらうのか、得意な部分を伸ばすのか。よく考えていく必要があると感じました。

